

論文内容の要旨

報告番号	空欄	氏名	洲尾昌伍
Potential role of the PD-L1 expression and tumor-infiltrating lymphocytes on neuroblastoma (和訳) 神経芽腫におけるPD-L1発現と腫瘍組織浸潤リンパ球の潜在的役割について			

論文内容の要旨

【背景と目的】 神経芽腫の約 70%は診断時に遠隔転移を有しており、現在の治療法では、このような高リスク症例の 5 年生存率は 50%に満たない。近年、腫瘍免疫に着目した癌免疫治療が注目を集めており、その中でも PD-L/PD-1 経路はがん細胞が宿主免疫を回避する機構として広く知られている。この PD-L/PD-1 経路を標的とした治療薬が開発され、臨床応用されている。PD-L1 の腫瘍発現、さらに腫瘍内浸潤リンパ球(TILs)の程度は、このような PD-L/PD-1 経路を阻害する薬剤の効果を予測する上で重要な因子であるとされている。そこで今回、小児神経芽腫における PD-L1 発現と TILs を評価し、その臨床的意義について検討することを目的とした。

【対象と方法】 当院と兵庫県立こども病院にて腫瘍生検あるいは腫瘍切除が行われた神経芽腫患者 31 例を対象とした。免疫染色にて腫瘍検体の PD-L1 発現を評価し、臨床病理学的因子、再発や生存率との関連を検討した。また、同じ症例において TILs の免疫染色を行い、その浸潤程度を PD-L1 陽性群と陰性群で比較した。さらに、化学療法後に切除が行われた 15 例に対し、化学療法前後の PD-L1 発現と予後との関連において詳細な検討を行った。

【結果】 31 例のうち、11 例(35%)で PD-L1 発現が陽性であった。PD-L1 発現と臨床学的因子との関連では、年齢、性別、MYCN 増幅の有無、再発の有無で有意な差は認められなかった。腫瘍の原発が副腎である症例に有意に PD-L1 陽性が多く認められた。また、有意差は認められなかったが、PD-L1 陽性例では腫瘍マーカーが高く、生存率が低くなる傾向(P=0.074)が認められた。TILs は PD-L1 陽性群で少ない傾向が認められたが有意差は認められなかった。化学療法前後で検討を行った 15 例では化学療法前で 8 例、化学療法後で 6 例に PD-L1 陽性が認められ、化学療法の有無による PD-L1 発現との関連は認められなかった。ともに陽性を示した 4 例では全例に再発が認められた。

【結語】 今回の検討結果から、PD-L1 発現は特に再発をきたすような進行神経芽腫患者において治療標的となりうる可能性が示唆された。